





同會印

印瓊

詞瓊綸四之卷

や

やの語びも。綱領の中のり乃便とお辞を。一の先に如き三皆徳守乃  
ぶり。そのやの写ハ語びの辞日ドキ申ホ。や何を語ひの辞アリム。おづく  
んともやううあらへて。かふどくあらハおれかくぞ

○勧めみて語ふや

古一 もふ四ノミテモ、あらはむ万てふうち字は やまのものも

後拾

左

いつとあくこくをあるとがことひ や

あドはち孤あかくほふを

千四 てる月おきび林の本 や ありとゆふかづづきみのたあ川のあ

新九

こ

こきや さはまきおもとふひときつたつとすなた乃と夜

万一 こきや らのやまをあつてハシがうきまくらふをふるふあせのひ

○私のま四

〇

月十八 うきやこのみからぬ門のづかふ御簾うるすあみをとあざと  
いせ 独房 こきやこの土のそぞろと べくをあがみすへたてまつり

又

金四 おもむはまはは葉うるく降よととこや 小生ふのをほびへさ  
好文集 みまきあらうりやうを乃もとじのとしきせぬわや まうが身のうさ  
こまくはそのまくさまうがみうさみどハ勤く用の言あるを勤み身の使  
みりかへて旅びくまみきり

秋十九 いまく川そくや まことにか秋の聲下はいそよけねのゆふうが  
音ハやのとふをそく秋とふとへくアモ朝までハからば。御をちの秋をやが  
て下とも風むて秋の声とできく。これを上ものとハいまく川そくやまどき  
よ秋あらん秋の聲のまくとりふましげうのすみのもののかどといへ

千十九 たりひかよよべ乃もとたかがうばこきや 欲まつへぬうりと

秋十八 おもきわくわが身はもとや 清みだりつひみは生への處とあり人を  
思ぐうりしてそしや そととじうぬまふもぐとほよその月を  
あまくもやの旅ともかるまくことまつてへはりてよし  
○いひうをみて旅ふや

後ま こきやおのゆくもくもとがとつたをとぬもゆふ夜のせき  
月十七 駿波はをりとみつの浦ごとにこきや このよせうとくと船  
後移 あらきあくとくもとをやまとくとむちや わでのふくら花  
金三 东嶽をもとかぶいづりうち月は約かよしや うふさうめ実  
秋十二 ひづれの麻はさざうとまくをうとあそ月日や まじあらす  
月十八 秋の秋は月や そくはのあみのう めうちかきあきのぼり松

曰云  
かゝるゝき秋のうえ やもつゝ山 茅あへぬ故お行はすくし  
曰十  
みやことを やちろとをうつのひ 夕若もふほとの下を  
曰土  
うつまけをゆゆゆ やよみふりはあ ほりらへぬ神を人のうふと  
後十九  
ゆふとせうくて やつひふやまの衣のそひもソでな人乃とめうは  
はあハヤミさんとつまふいひみもあまは衣ヨリ切とどくとのとひて  
下へできまへきての様と異シその形のひひきおもけねあモ

○切くや 魔のうち先おふくやき

古吉  
あふる麻ぞなぐるをとかべーおのが身のむとあらん や  
後四  
敷あくぬとがこひべ乃是とぎを本紫がくとれお敷ハキニ や  
後五  
とくやとたりひやふとふあなきをいふぞゑが神をくらぬ や  
曰十八  
うかうきみのふの唐乃うつせ見ひきにぬのまづハキニ や

曰土  
あたあはとをながくそ持ふとるのを布もとうりと や  
曰十八  
三へとくもかりとぬハをせふあき代ゆととをもそりふん や  
新古土  
難波がくみどりに芦のぬへとまとひをでけをもつとまと や  
曰十八  
いせありひりび やみのをひのむろ松葉アヘーハいつとまくば  
詞一  
ちう花とらもととるが やワのくみゆりもととくじんを  
新十  
被ふと月くときは聲をかげ後うちとす やじめのじえ  
新十六  
喜のせとくもくわりもとひあくはあくぬぞりとでどり や思  
新十三  
きく やいふのをえきぬとまつぶるもとひありと  
山 喜のせとくもくわりもとひあくはあくぬぞりとでどり や思  
へといふきくやといふともゆくとめ葉はよすのうきの葉ひやくぎて  
つてすりきいふづべきやとう等とほどまともいふそむくがくらえ  
てづきやいふとひとひともゆくとしもぐひよお學べとだべー

七  
十

彼の心は見えども、やがては神もさうかん。や

後子風

ちよと氣トキで終スルまぬ處カタもあくクんや  
ちあがめアガメのゆユき方カタ——  
かくカクとくトクんやとふと文フミを寫スルてあみアミてくクまれ

文獻卷之三

後拾  
十六

續文

あ  
は  
を  
う  
き  
り  
あ  
と  
や  
ま  
の  
こ  
と  
か  
く  
る  
に

切きりやきり。又もとづひてゆくと。文みへあやうれた。すまへどりうじ。  
後は涙へきみといふがゆうや。神事はまへせぬのありまくり。ばかや。切き  
りやうされやといしきつとめぶ格あればいぐん。らむへくれ刻きるとつむう  
てあらまうの、まのあと全く日ド敵あれば、まをあらまさんときてこ  
そよぐるべからんと取れどいぐとぞ。づとハラガメラリトアリさん。又秋をと  
え秋の夕をもひそよやくの月の夕くにこぐじの風。かみるやまく合秋のよハ  
月見よとてや共月の宵ひそよきにゆきあ。風雅にやそぎそ人のまごろむ御

さやゑづらうはのきでともあけ。こよみてやとりひて切るれ。切てはいくと  
きえ。切まればやの枝いとぎり。とみかくにまくらとまくら。まとまくら

あかよせ詠ひのやふ。遠のあくをかまく下をあめび辞をちふ。

のうちもふれて切る。二つまで。ものゝ上よりあゝ言ひ様子を定めり

あり。ありがふかくやの上も。かうじはぐ格の辞よとあけ。どうぞお

まきゆぢやの上ハ。ゆぢく格の辞ト  
あらが定まリシ。紐縫の中。けの所。

あり。切く移乃辭とハ。わがの。いへ。さてなかぞに。かくやの上ハ。づく。籍

もうあつた。たゞたゞかのづか得てあきゆゑを。どちらもおも

きり切るやの上よりか切り離す。ちくともかのづくとく

三  
二  
一  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一  
九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一  
九  
八  
七  
六  
五  
四  
三  
二  
一

くすりがさくじまうとて。スルやカクナやカドハいと。ビヌスルや。サマヤ。  
ソラガミキムリヨテ。スルやササギや。カドハいと。おいでともみかず。おはな  
て。ヨシタモ。モコロ。怪のそらめに。おでひやの上も。みかたの格と。んねだ。  
モモスロのあくびに。かくやの上も。ひや。モモスロ。きなきやう。きかくやう。  
ホツト。辞とう。あう。モモスロ。ひとふかだへて。ふねべ。ことへや。ゆ。  
を。いざと。ふきはわし。ほぐく。辞とう。あう。みまつ。まき。すうし。  
ち人のぬを。うる。ひひて。みだりに。まぐく。ば。まゆに。もと。かの。ぐく。よこに。まく。だく。

うり又すにとく湯ふとかや。うら文もやうめううそて、ゆくとまくしてと  
うかくこくくわかれぞ。いとそびかきとぞう  
古一  
うらひまの筆すりゆきとよ。先の筆れてかづん老かく  
やと  
ナ  
義のナ  
あうく  
や  
と  
てもふれをじらひぞうむくちりなび  
さく

内十九 ありぬや。  
とあらんぐく。うひよばたをすきあまきまであき  
こきくハやとゆくとことまと下へできくし

ハ あひのへのうちモレバ行び君を又見で や と弓を引くうちも  
ま 人をとどいま や いま や とちやゆく神さがみで弓をとどきて  
こゝノハまよ切 やみあらば。此のあうぢふかくやうも。下の言をとがきて  
まえをふく先て。やそ切てぞ。あらしがきあは。弓を又見で。やうんと弓ふ  
ぞうのかりりとつあきを。死さんとふきともがきて。まきをやく。おなう  
う。弓やある今やあるともと弓をとつあきを。あうとつあきを。弓をぶ  
まく。まくをとくとく

○やを言ひ候ふべ

古一 年はくらふもハ年はりと一させをこそと やいもんこよと やいもん  
日十 美ふどみまくわくくめゆくはあ やいとほぬ人 やヨミをあく  
計八 とととかくちぢむせんつう邪かく やうおーよ や美  
ほぬ  
久三 あむれきといふありてうなぐときんわ やえきあき やうあき  
日十三 無やうきそ やまどすほうきそあやどそもるがくふなく  
日十五 月やうきそ やまどすほうきそあやどそもるがくふなく  
凡一 売先や古加多 やうびりけしらなすドおもねは本のボリテ  
古八 えぞうくねうくろえよ今わバあ やとくと人 やとくと人

日一 そやうきそ やうきそくきくわかんそじやうそもももくわ  
後三 あどやあんき やせんとの川鬼はまのむをひりしやうかん  
古七 無やうんあ やうんのりそよひふもあれね戸もうじねふ色  
うのうたはうなばおあくやのまわゆし  
古九 おもちの川かくよしきうそくうんお茶は橋もくら やうじば や  
千三 とすとぬ やあうぶ やいふ うをなまけ船と坐あきびのえ  
千五 タ着うに金かけうしきうのあく やうじば やうもとかか  
名のをと やいあと やいふ いふね乃あどとぼー御もへふりと  
古九 名あくひちづきあくわんみやこむとがらふ人をり やあ や

又

万四  
かくしてやあややまかん邊づるをのあひどをあづまぬきて

曰七  
くへてやあや老さんみ吉ゆうた萬木生むうなうくふ  
くまうハあうぐにかくやうがきひめよつひとからうて二つのやをもと。一つ  
はげう。おとまよたりこまくみハ此様キ一又

チセ  
ことやゆゑいづきううつもうねまばとひよどもとよべきう節  
きとハやとかとまゆううまびし

○や何とほぐく格

後三  
ぬかとどゆうねどゆう家社乃かほりひふむをうな  
日十九  
馬強のくよぶの里へゆくりむを今津の山おむるまきやあぞ  
お古  
み川くわくしてづくまくにちけん人乃むりきやあぞ  
計四  
義がまめ神ナカ等するあれ尾上乃ま尔むをゆうやなき

東唐夷

ほそまぐわふまきてりおの帆うぎふるゆうからうりやたき

左一  
きくすたてゆやうづみうせむ若井の山おむらをゆうつ

曰七  
ゆくややゆくらへどくむいをあくにちくへてやうれとゆくん

王三  
ゆくまくわうやいづみうまくひまくでみやこやいくまうや

後三  
うちもくまくはさむかうのじをきく危のくうやあふくぐらん

曰  
あくふむなくふむれ葉あがのあくドやいくよあくん

後九  
たづつみみやこのえやいづくんあよしあうは月をくわと

新十三  
あきそくあやいうきくらうん今ハまくととああを

又

語音 みかづくふあらとうけぞ先代乃ね や しもとをほじふききん

ことハからむをそまうりもづし

又

詠美 さの君めいのす や きみのよ向していきぐ生田の川をよむゆふ

こよひのすやまむたむきぞとむきをやが下へつぎうめづし

まむ

後土 王がづみ か や ひづこそ さくらのね／＼あきるやくらぞうき

みのきかくか や ひづこそ 三とそく／＼あきる／＼ようもむつり松  
船頭 錦集 ゆきやくぬくう や あゆぞ 船のせぬき／＼事毛弓じとやくを

さきくはざを爲すり

又

後土 なまくら あざと麻糸をうひのをちくふばうのあ や なふう

れあをねかわ。二のあま枝のむすりかせり考へるべ一

又

詩主 きくや ひづみ うむちえあす風じふき川ふきまくあひきとは

ことひゆくやうて別れ上のむか やの像りかどき

○などや あざや

凡十 うきぐはうべがわきまち風めたがゆくへとじとや や あきこぬ。

脚注 あざや かくそとまちかくにあえせやがまくとへきとまちや

六帖 あいぬとてなど や うおとせえぎきんふいとばくふうはす／＼ねう

後十 あくをあざや あらのそりかんまはあやくしりかん

抜毛 聖はまはあざや ひきにもみづのあぬふきを引くめのば

羽八 滅葉生すりふとあくもみづをきくおかとおー人のあざや あきき。

○まを四

六八

舊古士

あぞ や

かく思ベドアモ思ひきのうをせりはるハづん

けうへあざやこそかとシ下へほそハてみまもとつみび

たゞく何ちお下へも。かとえう例うふ。ものぐくなどとあぞとの  
ニツのミ。やとえう例うふ。あ中にあどハかとえうがるやくして。やく  
あくべとまくおー。なぞハやとえう例うふ。かとえうとあ。

○あふるきやへふるきや あどハ別お下のきの條よ出せり

○やとけきのや

古ヌ うゑーと花まらざわす有ー葉うつふれふらんと や  
日士 お乃國はやのくへとてくじいきづるけえのまかと や  
日古 ううをぞうりあきぬとひりしやうえぬう や えーからべき。

日

日

日

後ハ りみだ紫色防風もほししまれもきてゆん人をあり や うめぬ。  
日十 離波グマガリフジサのテーでおもくもまをと や へづ。

古一

えのミ

や

人トかくもん山がくもんがおおてぬ、づとおせん  
あとみのなかがくやん

け下ハまかゆくやう

古一 クセシダば日月ハ若うぞゆりきまくまくはうりをとる。や  
日十 あうこやうとてかくもん山がくもんとをくかくす。や  
後古 あうこやうばさくめんのまくまく。や 様の向くハはうくまくは  
きくま。や ふくとくぎをかくとくもまとねむ人あがりせを  
もてキ や うめのや

後二十

ううもふあきかへ秋のあだうりやうんぬとあがひしきや

○玉の毛

〇九

ハ はくひくをくねくかき／＼まほ上のあをれ見となりひき  
まむ  
衣のみ  
お三  
お古  
古大  
居十  
古六  
居二  
後子  
第苗  
衣のみ  
いあ／＼ふりひきや】 さとが／＼か／＼まんゆ。』のとお衣を  
からふとくべりなとや】 秋のせめもとくねり日と着ぬべ  
ちぎりきや】 あぬけよあふき／＼うつき／＼りかくととと  
ありひきや】 おおむと望にかうへ／＼海士の繩とたゞりせんとハ  
たりひきや】 おとぬ／＼せりゆうとがくあざくにあまんりのとハ  
うととてハ美うとせりあふりひきや】 まゆ／＼もとととんとハ  
青け葉乃まのじらふとありひきや】 えとき宿をゆきてアんとハ  
まごてりひきやのやハ告やとのとシ。とて引ひきやとく／＼をかく／＼だよと諸  
ぶか／＼るき／＼とくらすかく／＼。とくうのとむひも／＼  
ありひきや】 あらの／＼をほどしかくゆ／＼きとてゆかすんと

こゑ／＼ハモとととだらきり  
又とを上り かきり  
居十云 きら／＼ちか人をまれすふ里ナ／＼お居せんとハありひきや】 お  
チナ じに人をあべーとハありひきや】 おがくらとへあくかちくらん  
又ととのみかすもあり】 お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼  
チナ 年たすてあるべーとありひきや】 令あらと佐野のやふ  
又とようひて下りとえとといとし。ことへいふがやや  
かけとづぶとおおうとありひきや】 うん年まの花をえととハ  
お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼  
て。おとと墨あらば。つま／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼  
ひきとわざとお／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼お／＼

○やそ

古一 まお東乃やまはらやう。うらはまもとそそてゆま やそかく。  
曰二 吹雪をなまく。まようがひもがあ やそ花ふみどふをまく。  
曰八 りわらとふぬでそそきよきりぐを船のふきハ勝く やそ うるぬ。  
曰ま かくちりをなまバオにそまづきめかぎての やそ まくとさり。  
曰十 野とくばうづと四くあはるんくすふ やそ まくこざん。  
曰吉 きみひあき岡 やそ まくぐ。  
曰十三 阿一毛行と秋 やそ 人のあまべき。あまびるとまくひきのを  
曰一六 ゆうがうちふるるをのま やそ 美といさん。そおき世をもうつとせんぞ  
後五 かくとふえ やそ そおきまくとま 阿一毛行じゆりや。ひを

金八 はのゆれまう やそ 人をひくと川 やそ とくまきゆくハアドリ  
後三 けあは芦のまうかのすをあやしくそまづくまく。まのち やそ  
やそ二つ行ふ  
あ荒 ひそくをふぬ阿一 やそ あびくべき。せふとまくとまふ やそ まくぬ。  
曰二 たのまくハシカ中にくく やそも。あび やそと。  
曰一 こよ下あるハミるかく やそきり  
古一 ちる花のまくかくある。あはな。ばあうがひもあかくまく やそ  
曰古 いのかくある。おゆきあくとまく。いみどばあくとまく やそ  
曰八 かずりたまきわむすきふくと人をあらふくまん やそ  
曰十九 ひしきん人をぞとしむかく。おゆきあくまく やそ  
後四 ふといへだことじくをまわる。れされどやまやまでこちよひ やそ  
武十五 故うしぱくとま やそ よのゆにいとがくときハアドリのまくまく

内四

きへくやを **昌** ひらりとひぐせんむぐくお家の船内ゆがめ  
はうのやをへたづへきつひがみ。下へてくすりまど。はぐきてへてふをそそ  
のちだ。切とてとをかうるやを。

チ吉

人びてハテーも **ヤ** とくとくやうんえせぢやふなまくすばるを  
こきへやとくかきるをとくとてでけへう。族後おきナセ好本あきバシマキ  
生バヌイ安中にあくむかくハセミヤビナヤをばやをんねだ。歎島のやうをを  
いふよとわきまう。

又一格

内一

昌 **昌** うきくつまうアーバムと人のあくらふにれやをせぬ。  
ほうぎく教毛筆をぞうじき。不ふ写毛筆をもへやをせぬ。  
おまえたりひやふくろうせうにあくまくお出くすきをもくせやをせぬ。  
いせま 航のせうり 岩とまくは花毛きみ。ひあをまゆきやをせぬ。  
原氏 うらうをは正か毛毛くじむかじうてふりん方アキモクしやをせぬ。

内二

後十 道もくでや **ヤ** トア。昌坂乃宣教あくらふくみとくとく  
件のうどとのやをハーフの機。初まの革せんがくとくとく。たゞの同とやをせ  
ぬハ何とくあくぬうりぞ。うきよかくとくとく。やをせぬ。何とくとく  
ぞ。うきよかくとくとく。モウのとくとく。うきよかくとくとく。後機をやをや  
そくとくやをやをハセマツとくとくの辞うり。

○やのまくやを

新十九 おくおうとくをかくは拂葉乃毛を **ヤ** 人のまくとくとく。

古十八 よむやハピクトキ **ヤ** うかりき。あおむらのとくとくゆくとく

新十九 よそにのくとて **ヤ** うらん。うきるみはまつじまくふとくとく

内士 かづくきやあ **ヤ** 久もの候つう。あきゆく御とめをとくとく

後十 まくとく **ヤ** とくとくべきつまくとく。あくとくとくのとくとく

やをいわせばよか  
やをあら

後編  
十九

すきぬ人のやかはしきぬをまうんぐりやにまつや  
□ □ □  
もぐくやそハ。やふとを深くものこそ。本ハシヤくのいよと  
ほきし。原をハナリあまきにやなやそなきりていて。了そと  
とソモ四ト。御道ども後景おきりそハ。やハシラ疑ひの辞。やそハミ  
のうへりて辞。別うそがめくらやがよ。今とおがくくれ  
をうちて。やそみきやのえとハマつ。

万葉ふかを流てやどりてあや。ニミセテヤのとゆも。やとのともと  
色リテトメ。萬葉あやれヒアハキモクル。九の毛みがくらひ  
えで、アリヤ。をうるどわのくじ。ハの毛アリ。アリヤ  
リヤ。アリヤ。アリヤ。

○ ぢや

古文

古川　おの川　お業を格子へとせ  
日　久々も月のかつても秋もあわれ榮もとと  
日　古川　おの川　お業を格子へとせ  
日　久々も月のかつても秋もあわれ榮もとと

三

古

おのづくさうもハシキをあやしくさせん

千  
十

五

六  
いせぬ秋の秋乃子を一よみがへる  
やうくちのあそん。

○ 五のを四

古一　かあてうそもや  
やまん。やおのひきまどひまくあく葉のふ

後後三  
余心も念  
おもひやうへ枝ふわくへはくら花いえ  
やまんやまん  
たかよしのむき

うなづ  
まのうへんや  
あぐもむとひにむをうなづまくりがと

かのよきさうぢやハ。やりドナアのせゆく所へうつて。かるべてえれバ。よくす  
る。あうぢや人よりもんを。べきハあうばんはよもんを。べきか。きあだぢやあが面を  
まもんハきみを。あが面をまもん。べきか。きあだぢやあが面を  
ハすゑーねをあくまきあわんかし。引もやをくんハ引もやをくんかし。もや  
あうんハいもやうんかし。引もやをぐまむハ引もあぐもじうし。壁かくのどうふな  
てまもん。引もやをぐまむハ引もあぐもじうし。壁かくのどうふな  
のよやとまにあらん。是ハ家計。六とひじて。やそハわざとをどつやうの跡。よや  
は辞ハうよハ例をく。すよかく。西ひうちふはけよもうり。又ちか戦一袖あきてきも  
ちやをくんりだをこがちもむくをあまよ。櫻がえ。じきハちか引うたとまのさをう  
くふきて。櫻がえ。けうとハ引もやとのよとよと。きを。下の引くんといふ袖あま  
きう。又ちか引がきう。も今もあうぢや。正が。どく。四ひつまセぬ。うれびとく。こ  
ハモヤを下やと写。りやまもううを。」

○ えや えやも えやも らえや

まべくをハんのまづき。おやハんやそのまじいざとも  
まづきへうつすらと角ぬ。

○ふのせ

日吉 みよしめちのきは若きみのりみふりとどきごい めやも  
後十三 リキヘテアシトギシ めやもとスヘダシヘセモ人のこころありきを  
古裏威 ハーおほまねのまにのまうーだみ人乃もうだくシガウヒ めやも  
後十三 室妻 あぐ波乃る源のをみれきねあきばをかけてわがうひ めやも  
第一 リクシニキヌメ めやも うげうかめりゆる日とぬきーぬを  
めやもハ多祭アレシタカーメ めやもと日ミシ万祭スハカヤモトリキ  
シトギシモカー

古十二 はのふれをあはのゆーせをとそふらがきこがゑ人あふ らめや  
後十八 あー引シムトミヌケラタニシコグダツムセビテカフヨウラ  
後十九 もらめや オアシキ人夫をもぐるは黒アラシミハマシハマリルモ  
ラカヤハラシヤモのまきり

○きや ふき  
古四 収の野にあくまく處ハあきや けくみきうす物乃ヒトミラ  
内生 黒ハあまて人をゆりにて金さきや 座もまざむも秋のゆきう  
日十 くべきやどきとぎな きや 待ひびてゆきうめは人をうよも  
日土 いせの海アラシをもく海人のうきる きや いわく川を定めかひつ  
内一 シタキアヒギトモさき了聞あきや ほきこううをもく人乃あき  
内二 きがきうみふかくきむくこと もや あがきまきれども人のあき  
内三 ちのうまれば塩やき衣のをもとあるまざわらき もがきまき  
内七 喜そそーぬたり後もくらむへーそそきる きや ぬのつゆあ  
内八 あめのむにあくまく月のうじたまのうじたま あきや 祢を過てこ



四

しのハヤド 拙とほ見えが黒若

きや

リナリモ波もたらぬ日ぞうき

千十七

おとこえてよみのぐべきみらる

きや

志士へ若め衣きアーラ

新十

あきば又あむだきやちせせな

きや

えり月の未おもく

四十八

やちくぐむうりにあまつれあ

きや

いも川水の新乃よみ

新九

花かきや かふのよみねがくすりあ

きや

レヒシホシのあみねがくすりあ

花万

カガネをばわくに 桃あにうと

きや

ちじはちももひづくひす

六八

うごく人のあくろもえくはれな

きや

きみのくもあくまくうが

あのきやハキアリやと筋ふくし。そそ告切しやうそ。さうめハヤの筋びよからだ。  
さておの内よ。モモやのきあらとまがひてせゆうがおなまこと。とぞうやのきう  
そ。下へきて必やの筋びそそがしを。ベアやのきうハ切ギテ。下ハヤの筋びう  
行く度。こきをりてかづけし。お祭十に引いたのたまへんをいぬあくとや梅をう  
さごそくにつけ。こきハヤとまわくばよやのきう。切とざくかふ。ありやの筋び  
う。脚を明称まえ考なきみハ下るを。さうかく一そくともくじつ改見て入

右ナセ

ぬがとおぶりてゆくせん布ナ

きや

トタヘミヌセドラム人モあき

四十九

ほまふ多々あられいくとみ宿を

きや

まきん人のあづきもせぬ

五十六

まくろば脚のあくゑいな

きや

もまべた猪はふアスムン

五十七

さとくぬまを教もいあ

きや

ゆふだもてかうかく

五十八

あくとくゆてぞうはあみきや

きや

さえゆくきにまこのがくん

五十九

おまくゆてぞうはあみきや

きや

さえゆくきにまこのがくん

後撰

ゆもねくちくううもあみきや

きや

あくとくあみき年ハへあ

六十

神を月あぐくつわもいあ

きや

くふとく一秋乃か人

日ナセ ハナゲホミマヌチアシモトイタキヤ

ホミハシヤハギ。上ホドシム相音テ。ヤミヤミシ。ホリノアハ何ヤ。ハナゲト  
カクレバ。モテヒ前ホモニヤハ前ホモニ。ハクホモニヤハヒタキモニ。

ホミハシヤ。皆同ド辞の格ヨ。ミハホノヘ黒シトロゼモバ。ま

ヒミベヘ。スカシト切キダス。トホナリ。ヨリモヤ。トモトシケガ  
アラムウツコエ。ヨリカミキモベヘ。

○左の句ホミハシ歎息のヤミシムグのミヤウツコエにあさり

○やぞ

度九 もう歌へてはドアカラキ成ル。城ホウグジトハカリアソンヤゾ

ヒチのアリ佐助奈糸ホヤモトアリ  
オササシタ後撰と曰くヤゾト者

ナニ 年にありて一乘株ナリ。阿古志もホミハシテアソンヤゾ

塔玲

月記 奉中歌ホミハシテミヤミホキナリアシテアソニ。アギクランヤゾ

日 宿尼きばトモキシキ門をナガム。ベキノトホリヒキニヤゾ

薰威

ホミアソブ。おいや。前をスルム。アハ。阿古志のホミアソブ。アソブ。

物志

エキシナ。乃育。一歌。アソブ。モホキセアソブ。称ホバキアソブ。ヤゾ

日

トホナリ歌アソブ。シテアソブ。モホリヘ。アソンヤゾ。キホミハシテ

ヒヤゾトアソブ。アソシ古ト。アハ。モホリ。アソブ。又後歌。トアソブ。ホミア  
モホベテ。アソブ。アソブ。モホリ。アソブ。モホリ。アソブ。モホリ。アソブ。

後ナカ

リホミアソブ。モホリ。アソブ。モホリ。アソブ。モホリ。アソブ。モホリ。アソブ。

ヒ例のアソブ。アソブ。モホリ。アソブ。モホリ。アソブ。モホリ。アソブ。モホリ。

○やうん

○玉の毛口

○十八

千ちる  
夫<sup>友</sup> おがくまをあがぐトおうりきあらそとぞ やうん かくづきもせぬ。

夫本  
易経

妻のゆうす ゆごもふうけとゆくあづのとぐとぞ やうん あめをさう。  
もべてやうんといすをひやーき辞え。うとと文ふをあくはえくも。今  
世の人へきをよれ何と豈ふをかがんほしなのふあらぬの言葉のうちもむぢにを  
おとへと難ぜうきう。

うだきうきこききの傳々ハみる新ひ乃やきり

●歎息のや なぎとハ後まへてうねひき、むろうのりよすきど。

もうてもべてふよゆく感ぜし易い節。ちく息をほくよし。まくばやき。  
あの歎息の声うちふ。今かうに歎息のやくじてゐをかたり。

古土 何一かとおまくぐへに乃うく波のあくど や 人をかくうしんとハ

月十九 忍へざりありそとものうよき『ばいあ』や 忍ゾドたりふうひる  
月二十 よのすはいふ や いふ風のまづまくふをすハぬやかか一た  
お云 そ一むとしかく や きうれむたるおどまくふもえやハをも  
履桂 十云 疏ぬきはの疏ぬぬれいと立ゆきやあわたはのいきよ や よふ  
金ハ きうきくち候の候乃うく波をかきド や 被のゆきもとをまれ  
ち二 うみど や うきよ波ものいそひつまく風うぶことへるをバ  
月三 きうきくじ 疏ぬき一 や とほくぎくゆくあり や よハ乃一  
月八 うりきうわが身をそ や 体みだりつひよハセベの處とあり今  
月十 人をうやうみつべ や 故もううとやとくふもくふをきうみ  
古 大 かひが板をねうへりや吹風を人ふをがと や あくつてやん

方立。 やあうぶやちあもぐる。 □  
やみやこまでかうりまきてらむる。 □  
や人をくみ下。 □

後 **ア** 狹女 **ア** あくちうまく海ナシモシゲホ **ヤ** キムツ海の底乃シモテ原モカヅキスルベ  
ヨリのるれのよきまわシタレどみづりに人をよせ **ハ** ホを **ヤ**

件のうちのやうな歎息ばかりでなく除きたまにハドカラ

又一の核

方某をも十のまに判人あきぎをや。げをやハトヤとしま日ドモ。口歎  
ものやし。又ナニヨリもニヤ。十ふたんもらや。また頃めある人や。きどい子囁

又一つの格

後十二 いうふせんあるらやかくのまは日や よはのあいたのゆくまくバ  
金八 空くましこやかく人のまうりきわるまくうちのまうりくや

千三 あ月あむらまくみづくあ神かまくあまもくみのほのまきひや  
　　くわくはよあるとひのとまでやくあつて、こきを歎きのやきを  
　　まく

云北 あぐまくわうけぬをくまかきくまればあむやづく人のこゑや  
　　けうへ中にのりドキヌ引くまきをかくあふくとくのまを  
　　まく

但十 納をくら麻のあぐくじめがえれまのやまのううがくのよや  
　　ちふとえてあくぞおぢくゆふたとくねのまのうすれくとくや

月十六 おののがはうすはドーあまぞあきれやうおさく 四子の恥め のえ や

四  
十  
やへやびぬあゆく小篠おきをほくもうかのあ  
一束もからに  
『やくはわきこひちぐ。』  
つとまらぬ。やまとほづ。せーのまくにつくみ  
まがわき

○もや  
はまハコのやくとも

おお  
ゑぐまむをさのあそき乃ゆく  
かくとまようえー

後  
十  
年  
在  
中  
は  
う  
な  
り  
の  
あ  
き  
や  
人  
も  
出  
で  
て  
か  
く  
お  
も  
き  
え  
ぐ  
す  
れ

卷之三

士あり破乃いもあらまくはる  
也。酒をなき人アガラシテアリ

口  
川  
津のまちかども春はやきな  
さや  
やの林葉に西風

六帖  
わうきよそせうまうじゆうどみ  
成者へせ去来す  
きや 人よそきて年のへやとバ

いせ浦尾　秋乃葉をもち日わきくわのな  
　　〔カク〕　クすみにちやち（カク）　まくらん  
　　シテ　おもやへうりとつふね　おのや　を　くまもと。うどや　へうりとつふね　日や　を  
　　ほく　きよそ。朝とや　へうりとつふね　がとや　わくかの　さと　うよ

後  
三  
うりあきは月がふあ  
きや  
やさぎと一ノ山のゆく方とさん  
とや  
黒弓のほひ射をどふえん

○五のを

一〇

残ちたま  
夢うちぞうびてハありゆたまさうにらす人あきや  
ねぢて  
「あくのわきやハ。うとをあく。歎息のやをあくにて。がくかとくとくをあく」  
日じ。ひつとや万葉集とくしゆ。そのもなに。詠み出しき

うらぞよびてハありよたまさうにふか人あもやスヤももと  
くわのれきやハうそとうそ。歎ののやをうそにて。かうそとうそをうそす  
タド。ばうそとうそや万葉うそ色うそ。せの毛うそにうそ繋うそむきし

新刻武  
陵系極

卷之三

むにあは月見もばめとあきや】衣川町

せうべて。やかくやあむやあどりても。ハ。鈴ひのや。あくとく。ま  
で。上ふ。うぎく。がく。一。ヌ。歎きのや。あくもたの。おとく。鈴く。う  
ま。がく。や。ま。お。く。と。よ。味。を。ま。ま。く。ば。ま。

○ ぞや 三の毛ぞの娘ノおぢ  
○ カツヤ ハの毛かの娘お出せ  
○ 一

口の毫かの歎吟出せり

ニモまでの傍々ハみる歎息のやうり  
いざと下はせ

歎息のやうういざとも下は詠びよやホ

○雜のや

かく志るや  
嫁をそひ  
引ひきや  
あらの浦

卷之二

卷之三

ちゆにゆる地名し。故ふくらきやあるのふきと。かくまと二面とん  
ねむハむがとじ。葛縫の内ようするふし。核をナニアブツキや。あやハスホの核つ  
うりえことハ赤やハと五何をへども。久年へくせり。モズー

ま

アシテ

いせの海や

アゲハチ

アホヒ

かくのひて下へ地名をもひがもす乃とさ

ま

アキハ

ヤヤモモ

アーチモ

ヤ

アシテ

ヤ

アモガヒト。上ハ松何そ下ハ地名。古風ヨリアヒヅヤカツアシテヤカツ  
ドより。但シアモガヒト言にアモガヒトヤアツヌヤアドヨムをアシテレ  
モアシテアモガヒトハアシテレ

又

アシテ

アシテ

アシテ

ヤ

ヤ

ヤ

アシテ

アシテ

アシテ

ヤ

ヤ

ヤ

アシテ

アシテ

アシテ

ヤ

ヤ

ヤ

アシテ

アシテ

ヤ

ヤ

ヤ

アシテ

アシテ

アシテ

ヤ

ヤ

ヤ

後拾

喜慶樂子山

や

あそきと山川乃いをみをぐふるまきことかく

はやハリと歌ひのやうて。ま衣をとめぐるそきれと歌ふぞうりまらかひす  
やうにいつてくともや風をまつとつまし。喜慶のうちもあまこし。かみ下を  
やのあびよきとりひてことあり。ゆきどもけやハいと歌くきて。うちま  
せてハ歌ひちあきがめくあるあふ。あぐくくうじんむせり。

○袖二つの間わをさしや

凡十七  
喜慶樂規

や

ね葉をうるおあちく秋とハいくぞぐり

はうれやに花やお祭とよあらと。撰集はお第十九より後拾のう。又風雅八分後  
拾也。序製などうのうそ。かみ下をぞ。撰集のやみはね改て集小竹枝。うふ。  
詞や詩などをう。又お考や折枝などはう。童蒙がよぐとへ月やえをと  
そよおれう。あどうり。とべてけやき。今のおみハあめねくすむうれな。あきう  
みまくくろくぞ。いやしげる辞じ。松冊ふくらむ人を花や様やといそぐ日  
とみがひをばそぞうり。源氏物語などあと花やてあやとりふとうり。これハ花  
よすよとつおほくして歌島のやう。おアリの様もつう。竹のひまわも要る  
や。おひまわべうじ。又よぬすくうきやするのひまわどもと。げ花や葉葉うど  
やと月と花とくらむとむかごとく。

○だや

あきハかくうう方角へと移ふ跡し

古三

さ月こばあきとゆうるん郊スミダーニヤどの聲をきう

をや

後拾

うううよみ月と花と聲はくわくハあきとゆうるんよんせ

をや

日十一

おぐれ乃をゆふくわくしもくたひのうのまき

をや

日十七

おぐれ乃をゆふくわくしもくたひのうのまき

をや

又

おぐれ乃をゆふくわくしもくたひのうのまき

をや

又

おぐれ乃をゆふくわくしもくたひのうのまき

をや

○五のを四

〇古

えせあをや

やまかをや

つとむをや

かのまくあを上ふもから。但し下にあらと。上りかくかとへゆる  
クジバ。そのもぐひハみのまおのむくくわくへり

古修々難のやうき。づともかくて下の旅びよハかつりば

か

○もべてかもやうけた辭るて。やとせりへひてよれてもあら。がふ  
あ葉よハやくつべき和をかといすすかや。それどえくうげやとくべ  
きかく。必かくづべき和とたーふくちきとまー。ぞうじにもつひかく。  
古十 みよへやのゆのゆの旅りうびせ流をく かのまくとくさん

新勢 てとく川 ゆきとけ景乃秋葉をくふゆゑくちりくとあん  
万八 内 姫ふるやめ本河の小萩りとづくふる人すくまきくちりん  
原作 篤ありすんちくづけややよいふまくとく人乃きくわやまん  
古士 ふくひ乃度めをふつきすす方乃きくわいもん 無のふ等きに  
ふき いとがりとされせ川をくゆきばくよ えゆく みちなまく  
新ニ かくびきく神聖の不れして今 ほん ふあきの花  
新勢 うづくれいへ年はのこえやくんしのそく あき まおま山  
原作 よそへとぞくべくりふくあめちぎく あき まおまのま  
出生 あらうたのかくせのうづふまで。やまきて。めぐらやの旅よ月ド  
又

え いつのすくお葉しやんひばくきのふ わ 韻のうせんじ

内モ 声をせむくそくと きく あくふハ地石いとへだかりき

あのうかのかた。並びハやの様よ月ども。やえせり。かりとすんと譯して  
キモ

井手 余をばあふかと きく かどわきやたそにあらみふせん

後撰 けいしゆう ありといあきみくらう人そくせめほくましの所

内十九 みゆきと う すふはやうせて今ハもあざるの様ちくほくり

あまうのかもやんのまくとへよよ月トモ。並びをたよみがれ

① かくか 使のうちをじかく かきり

古支 夕うれし人をきとをうらまくひあぎんとくとくゆふ身

内モ うけふとふやどや日月のとくさひなまくと人乃称よされを

古ヌ 秋の月ふべとやうふとくせすをわゆるお葉の敷をえよと

内モ かくす圓ノアラウセつらにぬねハよと今まにうきてぬと う

古支 フタヌハラんうかんうかどりアリマードの例をたゞまうこうくハ  
そぞれきハナク 例ナリラんうかどりハ万葉のあり

古ニ まみけゆハたまく う ちくまちくま人々あられを

内モ 船乃せみまのくわく う むほときほふせてまのく被とくらん

後十 せぐ被をくらんあはまく う えより底のあなりハか

内ハ 陽うきせめあがへのひまうぶあれをまく う やくまのま

後者に  
めゆる 川の音めきし。ふをうちかへ人の音めくらは  
お古 綾めく 紅葉の音めくらをうべきをかみのあハミムカホクと  
文ちたきめくハ向むまことかす。

文ちたきめく花やくさくのをも  
ちりかへ花やくさくのをも

お 又きりぐを表す。秋の音めくらにとむる  
内 うきがのやいぬ乃波のしめうせ松くぐと ク人の神乃秋まく  
内 くの音めくら。風の音めくらうち ク まきみのかづくまひ  
内 おおがくら ク 音を。バシリに神ふあづま、音おまけ  
又 ひうちなどへ音を下上する。まくらの音めくら  
内 えも ゆゑうとよ えー面音も葉音ももやまきをまくらつてあひ  
内 ひがむかくかくを下へまくらの辞をまくら

日 月をうわまくらんりの ク じく音めくれゆくのあむと人  
日ハ あくふく あふぞと人乃うり。音も處とあくべてまくら。西を  
いせ萬 かくとまくら

もべて後のまくらにあきて切くかの上を。下く格の辞トクある定まり。  
又 やのひがいづれく。切くやの上ハ切く格の辞トクある定まり。二事  
トカクの格乃うるを。二例をいと。切くやハアリヤウヤヒ。リヒ。  
かをわくかきくといふ。わきハはく格の辞。又切くやハアリヤキ  
ゆやくいし。かをハアリヤウヤヒ。トク。いづきの言を皆こくの  
格シ准へて。准へ。准にのまやのひの切くやの條をあくい。

後<sub>三</sub>

金

きうをやる其のかくみ乃郎ニ有レヒトシナキドムカク。

全八  
古一  
日三

つうじぐとしやくさんとハルモ出よ、あゆゑいのちゆー人ろと  
みトテ生めしベリ。喰はくはくはきとウとのぞうやまくれロ  
え乃来めふモウ。とどかばほそきとなく一あくわあくすもモウとぞみす

内六  
日七  
内六  
日七

浦ちかくゆりうすはあくもおあ乃ナリ。ふあをウとぞみす  
五ばくおもそとつゆあとまざはうん人ロとよもモウとよりん  
あのうちハカニ。ヤミトシミロとあくアヘタキモレ

○かをまゆ核

古三  
内六

シギの友あにすーとやうきをそウ。ワルウ。契のくみ  
よの中を差ウ。トウ。クウ。トウ。ミシキタクウ。

後<sub>三</sub>  
核七  
日大  
日大  
古五  
日大  
古五

西<sub>三</sub> はのゆれをゆわににつす。田モワク。タヘク。とえアモスモカ  
いきウ。あやウ。いふふりをモタナリ。和モウ。キウ。キウ。  
タヒウ。ヒグヨをバタウ。あモウ。トウ。シテウヒの城乃樹モ。いづきたらきん  
たりふべきとが後の母モウ。アキウ。アタレをアモハセアヘモ老  
ニツモ

古五  
万士  
古五

秋ゆめあきにしゆく。葉ハ花ウ。アムウ。彼のトすウ  
秋<sub>二</sub> うつふウ。妹ウ。ききませウ。美ウ。とこれウ。まだ。立ウ。志ウ。志ウ。志ウ。  
けふ葉のあきハ中のかたかた。かそをの命をも。上下さうニハトヘギウ。  
又四つも

○むのまに

〇せ八

古三、ゑや、／＼ゑやゆきまんかとやうぢを差クうつク詠てクさゆク  
新クありへうゞめクうつクこたうひてクなきクあさぎりんを  
六クけうハニツづニツマキク

○かとのこのか

後ク八クけひのなづクばあもでうすもあぎクドを取クりク人乃ほぎくク海ク  
けかと波クのあくクふ生クて下クへクかうクてうそクのまし  
四クトハみゆかクかうク

古七クあいぬとくクなどうゑふをせきまきんクいだばクふおほクとクあク  
扶クせクうじよをばそむクうどクとそむきクくんクねくクわくクとクハれクじきクオク  
後ク九クかくてのクやじクべきクのクうちクやクあクかクとクおクすクろクおク代クをクる  
後ク古クユクがクあクろクかクくクんクのクククらクやク乃ク下クたクがクりクうクうク

○かと

古二クえもえばクあクやクうク一クせク二ク三クとクふクべきクもクとク

四クちクうきんクうクせクつクきたクかクとクは年クにク一クとクびクうクあクふク

後ク大クみクのクけクをクぐらクのク鈴クをク生クがクよクはクうクとクそクまクれクくクねクのクうク

月ク十クヨクがクあクらクよクおクきクにクうクめクとクバク伝クのク裏クりクちクもクのクうク

十九クかクうクまクばクうクとクひクもクあクづクをクよクはクもクつクひクよクハクるクべきク

古ク土ク人クえクりクよクわクとクあクやクあク花クおクきクねクどクはクおクそクこクひクもクりクん

後二

三日もまつたまの

山

ももとるやうにあらわしむと

日左 きぢゆくそほくまきはすハアシビトハあくを おきよりハ

千ミ まちうてりやうとまきみけのちへまいくか おひまとのち

日土 りそやあじもんがきねまご 祛のぐとをかくとをうべ

○かのきのかそ

千ミ 行ふをまて日ハ神めらう おまきをかまきあじとん

行ゆ うきバキとシグヒギウ たが人のからせのゑみ萩乃下處

古ナ 花ごみからをどちし、ゆきとぞいくそぞぐくニグリヒト

日太 いうちんいとくはすにまみを トみうたものすとくん

かのやもまくしもくまのまの下にあくそハモベテ告かのき

○かのきのか

おべくかとがもとへ年日まよ。古ハモソイモハ。ゆきと後  
世ノハ別きうきやくすれふ。とづくくかのきかのきとみて  
奉は。やとやとよの例の

古一 はみどりえうりうけてあく處をかひとゆきもまち柳 う  
日二 うむべきぬとハナヘにもねくまちじじふもぐふい う  
日三 みゆもば草にまくまくをけぬてつとあたゑがくう  
日七 うじをうへどくもうといもれがまくまくよひ う  
日二 うつまはくわくまく 桜もまとくとくまう森ある

古ニ 今モ ウモ 嘴あわすんももちむみち小竹の鳴乃ひもんの巻  
お主 五士 ウモ 狂人 ウモ  
アリ乃山毛け尾のあざりをのちくノモトキモト モ モ  
モクモハタのキハ達の木に生てアヘキハタの木。其後古まゝモノモヤアビモ モ  
スンモノミヒオナシルのまめりうち奈。先ハヤトカトキモアリモトモシ  
古ニ まきかすくつろひよ絆ふくらへつたあじくとのえはうを ウモ

月九 ちのまくはりまけにとばす日をもほせのふすか一月  
月十三 むうしげひをもみがみとらねべと承ほくうをへそきん  
月十二 やアヒタモぬありふ人のまくはりまくはり  
月十一 あとのやま月クモ 空そまがくととがアモスモバムラシキトヨ  
月十 けとびハモヤアウモシ

○ かきめきのやまと  
○ かきめきのやまと

古モ まくはりよせらばのあざくわんまくはりきひ津ゆ  
曰干 おハダたきどくれまく拂葉乃ニシムだに秋のまくはり  
　　けり色美榮にいとがく。もてみ葉みくらべとばかりて。まくと  
　　のむつう。桂木あかどにちやうとしもみ万葉おうし

○毛かき

古サ ム科めあくのひ乃喜リジふ人のあざくはり  
五古 もちばる下ゆやほくにしつくものひをこひをう  
　　そうと  
　　けか万葉ナ吉のあらとニツツ音又古テ萬葉の文ホトキヒズメモ  
　　とく

○祭

古セ はくはくめくらきかむくとあづくはとつあくまくまぐふ  
日古 ちくねくみとゆくうんきく川もくまくうかばうくふ

核ニ 山道をにあす人とび耶はさぎにききわときうばつぎふ  
古テ またむくはあうのひ乃ふ人を人もくふふふ  
　　けふのかを後半六律てよめぞと本唱べき聲とる葉うかふさ  
　　といすひりせのも古風の歌りおせり

○かや

五十 正かくべきとく やまとバかくうをわが浦ノハはをぬよあく  
小火 なづうせであをゑりことば郊スモウリてとちと やえん  
　　○おふれ大へなずくはいたのそくかくやあらひつ人のもとづふくすん  
　　せきを方考ノ秋のくをしつゆをばれもまちうかくや。や。被ふきしん  
　　叶ニおハクノかやを尼せううそかや  
　　香やうり詩りハラノギ  
お七 あふと や うきのそくがハありやくてはやくむれをすをあふれ  
保民 あふと や うきのそくより御そつがおととすみくらう

かみとやとつて物も外れぬ處十三軒たゞへとどあもと

○何をかトふかくかクモ 次の何の辺カタ一かせり

○ぐかねきのがれハ 云の毛かねぬよ生葉

○あそびの辺カタ五の毛カタその辺にあそび

○あくをカタかば 云の毛カタもの辺カタあせり

○あかど あね毛カタこの辺カタあせり

### 何

○なづかカタあぞもれもれもがいふいふいふいふいづいづ

○何の辺カタとカタ。たりて此まに何カタといす。件の辺カタとカタ。かと縫の頭カタは何カタとカタ。うそし。そそきの辺カタも。いづとも何カタとカタ。中カタの傍カタは辺カタと。一の毛カタとカタ。三枚傍カタはぬし。云の毛カタと。云の辺カタと。云の辺カタと。いづともそれかとうげをあそぶ。云ふ准カタへ。此辺の内カタを辺カタと。みす日核カタ辺カタと知べし。

○何の下カタかくかか

○何カタの辺カタをかきて。云の下カタの辺カタとの間カタ。かりて次カタもとカタ。草カタにあら。○  
○かくかくさん。ももとカタくまき。ソウカタくまき。かんをカタくづめ。又カタまふあふうと  
なぐる。いつそ言ひ傳カタめある。かどカタのあく。かくちふりとカタ。そてけかとカタ。おの  
がく。何カタの下カタにやぐカタてきてをあき。又カタばなふカタもあら。うかをう

か人のくふんみだまとをかあそれまんあどりや。かと同ド。

後十三

ソレまでおもねま人のき物架うあらの秋乃夜をまくん  
たゞくえすトモとが家をせしめ乃浦ナヤドウ波あつうハニ  
かやうに何をかうく匂をへどもとれたり。そよどくのうちまことにまくびて。  
かくべきあきめさうどきわりゆふまきていづとあめくかくするハリマヅ。  
されやあきのよろしくぬちなあも、通じむけり。たかと。

廿三

かあをせれおのぐそてメぬナチギリウあん寝あ立だる

新納

あもとあどスと新のあかんをうるさても月ハレテキラ  
残後九

かくそだるゆ含めあいくらうむまふ位をれま

三十ヌ

いく勢にゆ先ウかどうくらうきの麻えの後のかのぞきくあき

万十二 韶年月みけるをあうべうにせばもむが室のるふやどクかく  
元浦 来 美代乃春みる日アリ先てえんねといく夜れむ クからくと  
源氏 推本 吾ぬくみうぎはの小ぜくもがくめにづミウあえん祝すにて

件のうごのかりトハ皆ううべのまくみあふくべきさうを。くとくふきぐ  
きあふせんとくねく不そくて下にからずねうて。いつともサヨカヒ。後事は例を  
まのべきにあらざ。ほ推セアドムにれうととんかくナキミ田のふ乃  
お祭もれをげくハゲ御りといひて辞え。上のあどみハかくねば別りし  
又あふしうあふークとあふークしもきーくといつーくといつーくをあど  
そもいたハーとももやまとめく辞みて。あふくもきういつらといふ日  
追き世は人も。おめく何ちの下にかくかりドを保りて。やとふくた  
わし。あきしとく人のかくんといひきを。あきしとや人のかく  
んといひ。あきまとをあはとのまんといひきを。たがまくまやあ

きのまんとすによしめたり。さてかくあややとかくハ若葉とし又あら  
らぬとの宿はおけ湯りまー。さやかくそくべきをさやとひ。いろも  
ゆゑふうといべきを。いろもゆゑやとひ。ばくとそくべきをもれや  
とやしに少數をしげて。古人の文はお湯りつるあきを。今の言葉文よ  
くかくと思ふ人も多く。じ極を難へ難をへ。とて何ぞのアミヤとい  
ふとさく。皆かうりとくねべー。後撰一到あいふぞ。あやあくすん。こきハいふ  
ときくよ人のキテヤをがく月のまづくまん。こきハ「あき」と。へせばもれのう  
のひとトヘ及ぶぞ。源氏主あ花引き。それでのどなきのまづくを人をいふ。あづや。おれ  
をいかで望どバ。やり。妨か。こきのあくとをたしくえてまだかづく。おきま  
きくに見きて。虚の衣いくがきの被原の浦のはやとうん。ばやりトハ得りきり

但一 あどやあどやいふぞやいづくぞやあふされやいふきやあどぞ。  
別一つの様よそ。こきの様ハきほのか一急てのうかづく。えやくやうく  
別一つの様よそ。もやの終えをせり。あ一急てのうかづく。えやくやうくを

○勤めままで旅ぶ例

後撰  
土

よすかのまつりはとくかくまくせよ いづく うのふれぬ蘿うる浦

日六

いのねきかきあら山をむきく危もいく へ乃あとむきく

日六

ちきかく添み葉なぐれぬ大井川 いづく ぬきにのみれぬくみ

書く

行きこそばまげますむのまよみ経てあふとば あど いづく

後撰  
土

いの うちれをあくよあくよなると うそやん人をとの

○いひうきて旅ぶ例

全文

いろをうり弾もくわいとみうき山ニ紫れま乃ちよはぐれを

月八

うふもてあらむうみほりゆるほど

御八

いくうりほじと人をみゑせのうそそくすゑくまん

秋四

たきをくとまくちめひ乃女やむ秋と衆も人ぞ行もし

月六

太くまは秋のねだれお高きバキたが神あけり月の月

月十

いづくありことひと宿をかりてうそともゆふきはまの竹比奈

内喜

なまくしてえしハあざりおもぞまどあゝ月の花は下月

内六

いうふくそゆきどよみハありぬのつきせぬあをいよあらうも

月二十

あふきくゑゑかくくいつういきはねまうくんあをいばうに

万九

ゆのうへ乃はねのゆゆ秋はべうきあきゆうたきよぶこむ

○金葉三のうへのきふそのまくひひてう津乃ま下月のまくらん。れ、  
班波をやぞかみす辞よひうくまうの様シ

○切うり何

きのそじえれうり

後十三

たれゆふやあくめをいふきつりか。ほうにぬと忍びを。う耶

接十八

いきしるわゆう。いふ

保氏

いぢやあぢ殺すくぬ身ふるひゆく人ふまきだおむからう

後十九

くふくくあああくくけをきぬべきあを

文下

くふくくあああくくけをきぬべきあを

後二十

よみづのめ人のうら波まくまくばまくまく

○あゆあいづくひてかくおり。まくまくハ下あくいづくの條く別小  
かさく又や何とよやうだわ。ほのまやのまよおせり。

○ゆのき

○ゆ



○色とあらわす語 はねはるよかうじば

古ニ わきつぞうひてそりつゝ事お向ふもとハ **レム** うと一うじとおへぞ

日十三 うをまほやま乃うつはまとうきまく美尔 **レム** うとまほうびうきまく

日十六 いくよく色うきト、あめをまどもからむけうきとふらひもく

日二十一 まくふく人へねまほまのせみことかも **ウム** うとくひあかうきまく

日云 いつまきと月見ぬ秋きなれりのまもてこよひのそづき

日八 ひづくおもちきハまくしめどおふく戸のやもとねふたせき

日五 ちばーまふかどくまみてあが **レム** うとくひあかうきまく

日八 たき がよきとよがよもくぬよみゆにま川あどひをうんとまん

日ヌ 月見まばたき とくぞなぐさまな候様山乃ぬりをうねど

日二十 うつ おりもくすりなれの月あざばく人さへおへぐくたう

日古 いづくをきくぬとや人乃あくさんあぬタゞきおまくの聲

日十九 あくをかこへ **タグ** いづくをまくまでまとせーほのをみま

件のあくとのぐくとくまきまきハまく下せぬびるハくうじば

日七 あくとせぬくへむとよそーかど見るくとくにと **レム** うとくかー

ゆがうしきゆきみうきよかうげ **レム** うとくかー

古七 ゆうれてもううへぐくか旅衣 **レム** うとくかー

あのやくうとくとくまきも色に

古十 いま いくうもーなりとばなる色あきあがせてありかくうき

後土

たくひ乃まみれ葉あづきのもの

角七

きがたをうへき人をかきあぐ

音勅

あふのつまきをもやねん

風十

とばとのまゆくて乃ちめぐらす

敷等

たが黒<sup>シタマ</sup>梅のよごす

人一

人一もぐとまうもそへてと

教等

きみのうひうへぬべき節

こまくいづともとといあれた。ととあらじし。のちまへはまくわ

を入きてんむべー。凡雅十二月をもぞうしめうのたばつし呂ひばうふ

を今はあらざれぞちき。こまくはまくいのあさやかな

○一つの何

けねびりかくらむ

古吉

みちかくのまづらぢり

たき

ゆゑみまこととまよ

因十

はのあけ

難收

ひづこ

六帖

をありをばふろれまふきえんのとよ

因二十

みちのくハ

ひづく

六帖

一

をわきどせがみは浦へお乃つまで

因十七

梅巻

いつ

をもくじ

一

をもくじとひそみどりきみさくとハ情きぬをく

此格ハあさてよぬ<sup>ノ</sup>對<sup>ヘ</sup>て。そとくみ化のぬを何とつる。古きのうハ。只ふ人  
又對<sup>ヘ</sup>て。も代の人をもくじといつる。もくみきて、他の人にあふみまんと口ふあ  
らかくにし。又對<sup>ヘ</sup>あふ是をハ。まくにまんするもくじをもく。も化のうハ是をくも。  
いづくは行ほどハ。化的のぬをもく。いづくまくとおどハ。化的のぬをもく。じとおどもくと  
おきもくふそん。いづくとおどハ。化的のぬをもく。じとおどもくと

○け格<sup>キモ</sup>もくじ<sup>ハ</sup>は行ほどハ。是をくも。別おまかれきがの傳<sup>ハ</sup>もく

おの傳<sup>ハ</sup>何のぬの傳<sup>ハ</sup>。おべてにまく。格<sup>ハ</sup>もく。一つの傳<sup>ハ</sup>もく

おの傳<sup>ハ</sup>何のぬの傳<sup>ハ</sup>。おべてにまく。格<sup>ハ</sup>もく。一つの傳<sup>ハ</sup>もく。

○ちや

● なふ

○みのを

○成<sup>セ</sup>

古ナエ

うひえびばくとまきみれみるせ川

あふ

ふはうて只へそめきん

辰九

あふとれかくあぞとはありがく玉井をぞうり  
あふハホシテアヤカタヘんきよよとひのあふとハ別也

○あふせんホ

古古

りふまをはかとえもあむとあふせんホえてもんのうぐゑあくに

辰丈

あふせんホへとのみををかりひきんがきつを巻をかづくよほして  
こまハせんホとすをゆうり。そ古うきまへ切。ほれうハ切どじい  
ふみいきうきく。

○あふせん

格士

あひあきん辰ちあふせんじまつねがくと金えきくや

まとハせんホうじてあうトハ

○あふホ

新製十一  
李京威方

まご川せぎりにむきむらの床乃のうき  
あふに男へそめきん

六三

わきむぢめ者多きむけをうふほの写代

あふ

一ふつそぎきん

○あふホ

又辰機セ

高居

一葉りうそ老えーあやうん花りてもやもゑもとあくふ

凡ニ

白河唇ふふくたづのみハホではうふ

あふ

一ふくろをうづぐくまく

○あふと

新後二  
あり

あふとかくうづきむ乃多幸とむくぬくたりひそめきん  
新後十  
下野院ゆきうきて一束やくねねが根子

あふ

と岩根とぞくさん

○あふとて

○あふとて

四千

後土

差付びとをうねきぬとさうりあらと

うふ

そり人よりひと足つん

橋川

もくねしやエグよとのことうきくさきみ

うふ

そて年のことをいそぐぞ

○うふそ

古

うれに人乃月を

うふ

そのゆゑをとありむたぐもうちはだもつ

山そハギズレ。猿三のものぞのめいくそ

の様うくもへつら

○あ葉ニハうふそとくとひすとまく。又うふそれぞさあり。

わくと古と以降スハテハラヒ

○一つの核

全又

ち度乃キミヒは取を

うふ

うくも。ほきせどるもるうるは代り

渡後大

志が代のねぐくべや

うふ

うなうト。ふあめはのちの砂うりち

公喜

うふ

うくも。よのめかえをかぶとアラバム

大和

うふ

ぞかりもくきうぎ。よのめかえをかぶとアラバム

橋川

あひてのうくも。うくもバキチ一月日も

うふ

うくも。うくも

○うふそそ

二のまごのねふぬ

うふ

うくも。ほきせどるもるうるは代り

○うふまや

けきやのねよ出き

うふ

うくも。ほきせどるもるうるは代り

○うふくかや

けきかのねふかき

うふ

うくも。ほきせどるもるうるは代り

○うふうと

うだいし核二のまごのねふぬ

うふ

うくも。ほきせどるもるうるは代り

おのかまくうくも

●など

○下にかうとをふく例。あどうさどうそと。ほきせどるもるうるは代り

うくも。ほきせどるもるうるは代り。ほきせどるもるうるは代り。ほきせどるもるうるは代り

うくも。ほきせどるもるうるは代り。ほきせどるもるうるは代り。ほきせどるもるうるは代り

○ふのとせ

○四六

後孫

○あど

□かく

きみうんかく

わうのど

ふをもる

月もう

すふ

かく

うんかく

かくわう

のど

ふをもる

月もう

すふ

千三

○あど

□て

くく

ありひ

そめ

えん

部

うき

おみ

やう

のは

乃

たえ

うは

いせ

○あど

□て

かく

わう

ごく

まく

えう

うん

かく

うん

かく

うん

かく

うん

とまく

て

を

ゆく

かく

うん

かく

うん

かく

うん

とまく

て

を

ゆく

かく

うん

かく

うん

かく

うん

かく

うん

○あど

みちよへ

ひりけ

ゆを

あど

て

な

う

も

も

あ

め

人

○あど

か

か

か

か

か

か

か

か

○あど

あ

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

○あど

あ

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

○あど

あ

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

○あど

あ

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

○あど

あ

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

か

○あど

か

か

か

か

か

か

か

か

●あど

か

か

か

か

か

か

か

か

か

○一つの拾

古右 みちむくのまづらぢきたき ゆゑみどりんとゆゑあきるよ。

後四 まゝ人たき まゝまゝに郭公かりひのかにをうばうかん

お土 まづふみたき ゆゑあきぬ。あきれぞ今ハあみはゑすへどん

古右 たき 秋すりゆめりのゆゑ女帝をもぎたまふ

内十二 あいあきばたき クタナドモキテあきゆくしひかきを

後十二 ちうひてと終ありよもまきふきたき タガとめきに令下たき も

万七 やうきーをめきやまきたき タガとあふみ年もかどわが身をもくに

内 みかさにあづくたき タガゆゑみかづくくさがふとくとく。

内十一 たーてま稚波麦笠たき 後たき まん笠あくさ。

内十二 里人たき 名うゑ

美榮のハ程あり。此様を上よせざたき みらのイハづくたき あきとくたき ある  
ドのあと同たき どとあるとたき ど。もとたき うがくたき いすたき は。中たき もときたき あ別たき よみて  
そにゆせり。まきたき はかたき とこにりすたき ど。俗たき の人たき をうてたき たきたき とく。

叶たき あくあくとく

・いふ

○いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ

いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ

古大 いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ

いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ

古大 いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ いふ

○称がまのいふへと 俗はよきよそへとよまし

後十 知りの四よそへと いふへと れかじひり人をへん

内十三 いふへと かくやよそをよそふ人ほへあくでるおかさん

内十四 いふへと あとくらうんぬそぎすながきめ下にあきばうひや

○いふきや けもやのねきやの條よみき

お乃和あくきよとあー

● いふ

①下にかげて伏たく傷取一

● いふ

○いふ

括十九 トおあは いふ そせき一あげふのまき集乃松のまつーどふほ

考廿 オのおりよといもぬやうハモフロヒ いふ そよべき被ひもづくを

かくのめく下に毛を拂てとさう

けやこときよりや

● いふ

○下にかげて伏たく。いそりいそりかげて伏たく。まつをかくのまつ。御をへだてかく。例ハ

○称がまのいふで 俗はよきよそへとよまし 井掘縫びよかく

後十五 いふ トおあはぎりもせぬくものとがまあくのをよそへとよまし

○玉のを

〇四十八

月十九

○いそ うすかきどりふりうをすて處々き縫ふそんとぞるふ  
桂ニ きくわく阿々ハ いとで みやこへ告げんりふに川乃軍をもねゆ

月二十

ゑといへぞ月ド詔ふそよすを いとで あめを人よまうせん

月二十三

美をじふ いとで かくみえすてごるもとめよのあくまふせん

月廿七

いと あいのどうむをあくらんきあうてうみが代とハると  
お移セ 公ム

みか人のいとで とれりよようびまたえーともをいのうるふ哉

又かをはてとうもあう

月廿九

お土 いとで クとありよそもあらきハあがりくさぞうめくりく  
又毛を傳ふ

月三十

ま本 ひとで もとよみやきけりかゆお井よりとれぞはさきくわゆ

月廿八

ヌニつまゆとま いとで ちゆくをなづみて後乃西までおぬをむち

月廿九

○いづくいづくいづくいづくあじとよ

○いづくいづくいづくいづくあじとよ

おのやをとすとよ

●いづく

○おのを四

四十五

○まごといづくは皆切き格子て下へでう例をかへはきくやくかすや  
古七 わくまき小ぐをや。いづくこよみの強乃底正をあきふかふらうと  
後せ ゆもあそにふる。いづくとまちどひつとのえは處とひそは  
いせ わくいきへ乃あかひき。いづくはうむをこきかくもくふらうと  
古八 よの中う。いづくあ事のきてあらむれやくらんあらうやいん  
新十 いあづくはあらまぬよひもきりうと。いづくはのふそしをくふ  
綾衣 きのをう。いづくとぞそのれやこれ。人のめがくらふとおられ  
ヌアーノをゆてまどり

古十九 むつともきづつきうくわぬきを。いづくもあつぢーとふゝハ  
後十 うとかくもいふきは葉のうしゆ。いづくもあのかやアゴトクハ

全八 うかしてふねをまほりきゆど。いづくもあにこう本の里  
全一 古のやあとひるよ

●いつ

○いづくかこまはつぐくと。いづくを不きをゆくぬよ。一ハやをめ辞あ  
きがりとハきある。おまざと後半へいつくといへど。別あ一つのまづくあれ  
後一 ねをむきわきもつまびあらゆ。いつくさうをやもはくん  
桂十九 いつくもほくまほまくうせきんつまき人乃なべのねえん  
古四 リよきは今こんまほきのふをぞ。いつくとのまさらあらべき  
後八 いつくとひのほくを立正。あく年はこくふみをまくん

内九 いつへうとわがまみふれすへうすちゆうじゆくやくと神ノ御

内十 いつへうとくまびまつまほたをそくよそそうやうりうれ  
内十一 いつへうとゑるとぬくに志萬をせはのとせゑぞうよまつて

内十二 いつへうとゑるとぬくに志萬をせはのとせゑぞうよまつて  
件のきどとのいつへうハソイシと後まし  
まく

内十三 いつへうとうかでそればあみむねあらとふうとのふきうか  
内十四 いつへうとくもくすくアリレフ日を背アシテとくたまくづかん  
こまくハ後アヒタマニハ行アヒタマムがゆくせゆきち。あやけまくし。おきのき。いつうと  
まちてあきてそくればし。六临のハ。口のタの上アシテてくねアヒタマ。じつを海アシテて  
と後まし  
まく

全一

いつへうとぬかまみが生をうを天のナキヤ。もくとうん  
いつへうとまほをくにしゆく。あきねのまくは處アヒタマなり

千土 たりよより いつへう やくたりをがみをぞ志のきよべきりまく

内十三 よせにそそぎどきへんよ いつへうと神乃もづく代アヒタマりべきかれ  
計大 ねじあしとがゆくちむこきのトドケ いつへう うちんぬとがゆく

内十四 あひの先ねえまくわく いつへうと筋のりくにあひをめかひ  
一赤集 いつへうとがゆく。空のあくきがまくし人をいきるもん

内十五 あのうちのいつへう。もやくのまくとくまく  
かのがあくうとく

いく

○いくいくぐいくそばく古文 いうぢうりあどりよ

○までいくとくよ辞。初事の事へみだりにいくとくよ代あど

○いく表紙ざめぬのれいよびへりうるにゆく  
あけかとなくことあり

